



TITLE:

マルクスの書簡について (マルクス 生誕150年記念号)

AUTHOR(S):

編集委員会

CITATION:

編集委員会. マルクスの書簡について (マルクス生誕150年記念号). 経済
論叢 1968, 102(5): 450-452

ISSUE DATE:

1968-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/133307>

RIGHT:

經濟論叢

第102巻 第5号

マルクス生誕150年記念号

生産力と生産関係との論理的な関係	出口勇蔵	1
経済学批判体系と世界市場恐慌	松井清	33
マルクスにおける「国家と経済」	島恭彦 池上惇	60
19世紀中葉における資本の 直接的生産過程	坂本和一	96
思い出すままに	福井孝治	125
マルクスの書簡について	編集委員会	128
トリールのマルクス生誕記念祭記事	編集委員会	131
京都大学経済学部所蔵マルクス・エンゲルス著作(1845—1894)目録	経済学部 調査資料室編	134
マルクス「資本論」100年・マルクス 生誕150年記念論文・記事目録		

昭和43年11月

京都大学経済学会

マルクスの書簡について

編 集 委 員 会

福井孝治先生（前大阪市立大学学長，大正11年京大経済学部卒，昭和21—22年京大経済学部講師）から御寄贈いただいたこの書簡が，はじめて印刷されたのは，Marx/Engels Gesamtausgabe, 3 Abt., Bd. 4, 1931, SS. 553-54（書簡番号1538）であり，その脚注には「この書簡の原文は京都帝国大学経済学部にある」と記されている。これは福井先生の文末と符節が合う。改造社版『マルクス＝エンゲルス全集』第25巻，1932，166-67ページの邦訳は，上記 MEGA 版をテキストとした，現在までの唯一の邦訳である。この書簡は Marx-Engels-Werke, Bd. 35, 1967, SS. 85-86（書簡番号42）にも載せられている。大月書店版の邦訳がすすめば，訳出されるはずである。書簡原文と MEGA, Werke 両版を対照すると，Werke 版のほうがやや忠実のようであるが，意味上の相違を生じるほどのちがいはない。Werke 版には編者注がつけられている。К. Маркс и Ф. Энгельс сочинения, 2-ое изд., т. 35, 1964, стр. 69-70 にロシア語訳がある。つぎに試訳をかかげる。

マルクスからグレート・ヤーマウスのエンゲルスへ

北ホテル，ローザンヌ

1882年8月24日

〔フレッド〕¹⁾君

昨日ディジョンからローザンヌへ向かった。雨が降って，冷え気味であった。雨のなかを夜9時にローザンヌに着いた。ボーイに対するぼくの最初の質問，ここではいつから雨なのか。答，ちょうど2日前から天気が悪くずれました（そ

1) フレッドは消されていて読めない。

うするとぼくがパリを発った日からだ)。おかしなことだ！

わたくしたちは今日は、落ちつく先を探すためにヴヴェ、モントルー²⁾を見てまわった。そのうちにローザンヌへ留置き郵便を書こう。はやく、いくらかの追加の軍資金を受けとって、いつ、どこへでも自由に行けるようになれば、うれしい。宛名はカール・マルクスではなく、Charles Marx 博士だ。

ロンゲはぼくの出発の日までいた。つまりこういうことなのだ。『資本論』の翻訳者の、あのあわれなロアは、ぼくが昔2度アルジャントゥイユ³⁾に滞在していたとき、ぼくに会わせてやるというロンゲの口約束をえていた。だがロンゲはいつも、いい機会を見つけれなかった。そして今度、ロンゲがまたまたロアとの会見の話を持ち出したとき、最近4週間のあいだ、かれの自由にことをまかせた。ところがどうだ！ ちょうどぼくが出発する当日——荷物をつくったり、ドゥルラン医師⁴⁾に別れの訪問をしたり、イェンニーとまだたくさん話さねばならぬその日に——ロンゲは、ぼくに予告もせず、パリへ行き、ロアをアルジャントゥイユへ昼食(1時)に連れてきた。つめたい北東の風が吹きすさんでいた。そして、あわれなロアと庭でお義理の会話をしなければならなかったために、ぼくは風邪をひいてしまった。ロンゲのおかげだ。

話は変わるが、パリからドイツのたくさんのブルジョワ新聞にネタを送っている、あるドイツ人の通信記者が、おそろしく鄭重に、ぼくにつぎのような手紙をよこしてきた。自分は社会民主主義者ではないし、ましてその系統の新聞の通信員ではありませんが、ドイツの「社会」のあらゆる方面で、貴下の健康状態についての公式の報道が待たれていることを、貴下に知っていただくことを必要と思考する次第であります。つきましては、アルジャントゥイユでインターヴィューをお願いしたく云々と。

もちろん、ぼくはこんなおべっか使いの新聞屋には、返事を出さなかった。

2) とにもジュネーヴ湖畔にある。

3) パリ郊外にある。マルクスは1881年7月26日—8月16日、1882年2月9日—16日の2度、ここに滞在した。

4) アルジャントゥイユのフランス人医師。1881—82年にマルクスとその家族を診ていた。

皆さんによろしく。

モール

眩が出なくなったら早速、老ベッカー⁵⁾とヴロブレウスキー⁶⁾をジュネーヴに訪ねるつもりだ。

*

*

*

この書簡には、最晩年のマルクスの寂寥と気骨が滲み出ている。マルクスは前年すなわち1881年の12月に愛妻を癌で亡くし、かれ自身の健康もたいへんわるかった。1882年、かれは健康の回復を求めて旅に出た。6月8日から8月22日には、アルジャントゥイユの女婿シャルル・ロング(1839—1903、長女イエソニーの夫)のもとに、身を寄せた。そして次女のラウラ・ラファルグを伴ってローザヌスへ旅し、そこからエンゲルスに出したのが、この書簡である。かれはこのあと、書簡にあるようにベッカーを訪問、ヴヴェにラウラ・ラファルグと滞在して、すこしく健康を回復した。マルクスは、ロングをブルードン主義者だとして、信用していなかったのであるが、かれの『資本論』の仏訳者ロアに対する不気嫌、ドイツ人の新聞通信員に対する侮蔑には、マルクスの一面があらわれている。マルクスは翌年1月長女(ロングの妻)の死にあい、かれ自身、3月14日に逝去した。マルクスが妻を喪ってからの最後の1年は「緩慢な死であった」(メーリング)といわれる。『資本論』の仕事はもはや続けられていない。それでもかれは、病気の間を縫って、ロシア関係文献、寄贈された経済学書、物理学・数学などに関心をしめした形跡がある。ドイツ、フランスをはじめ、ヨーロッパの社会主義運動は、東天紅を迎えつつあった時であるが、マルクスの家庭には濃い夕闇が迫っていた。

(田中真晴記)

5) 国際労働者協会の重要人物(1809—1886)、月刊誌“Vorboten”の編集発行人。

6) ポーランドの革命的民主主義者(1836—1908)、国際労働者協会の総務委員でもあった。